



中央が日野。放課後プログラムは8回コース。ハーレムなど市内の娯楽センターで夏まで6コース開くが、「その後も」と市側の期待が集まっている

「きりーつ、礼、着席！」
日野紀子(40)のよく通る声に、
黒人の小学生15人が立ち上がり、
ぎこちなく頭を下げる。
ニューヨーク、ハーレムの娯
楽センター。金曜日午後4時、
日野が代表を務めるNPO「N
Y de Volunteer」

の放課後プログラムが始まった。
外の喧騒も気にせず、子どもた
ちは静かに座っている。
「イチ、ニイ、サン」
前の週に教えた日本語の数字
を子どもが興奮して唱える。数
字ヒアリングテストは、15人中
8人が全問正解した。

NYで日本の心を伝える

ボランティアできた

元OLがNY在住の日本人を集め、日本文化を
子どもに教えるボランティアで奮闘している。
ボランティア苦手意識の強い日本人だってできる。

この日のハイライトは、みん
なで浴衣をまとって茶道のお稽
古。リノリウムの床に敷いた畳
に正座した子どもらは目を見聞
き、茶道のお点前を見守った。
「タイヘン、ケッコウアス！」
呑み込みの早さに驚く。
「感動を作る、という言葉は作

り物のドラマみたいで嫌だった
けど。でも、こんな感動に開ま
れるなら、ボランティアはやら
ないともったいない(日野)

年1月にはNPOを設立した。
昨年、初めてニューヨーク市
の委託を受け、小学生の放課後
プログラムを開始。日本文化の
紹介を通して、異文化に接する
機会を与える。

浴衣を着せるなど、「黒衣」の
ような十数人の日本人ボランテ
ィアは、学生や駐在員の妻が中
心。入れ替わりは激しい。企画
づくりから運営、会計、ボラン
ティア募集を日野は一人でこな
す。「2カ月に1度は過労で倒
れる」激務だ。昨年は8万ドル
の寄付金を企業や個人から、た
った一人で集めた。

「子どもの将来は僕らの財産。
でもノリコ以外の誰も、こんな
素晴らしい企画を持ってきたこ
とがなかった」
と娯楽センターマネジャーの
ステイブ・ジョン。

物心両面の充実目標

「異文化は知らない、と言って
しまったらおしまい。子どもは
吸収が早くて、視野を広げさせ
る手応えがある」
と日野も強調する。

渡米15年の元グラフィック・
デザイナー。2002年、勤め
ていた会社が倒産し、「やりた
かったボランティアを」と準備
を始めた。

だが、年収は2万ドル。今も
渡米直後にみつけた8畳ほどの
学生アパートに住む。同じ広さ
の隣室を借り、事務所に使っ
ている。バスルームは共用だ。

最初はニューヨーク市内の公
園の美化を目指し、日本語のフ
リーペーパーでボランティアを
募集したら、いきなり40人が集
まった。「学生」「駐在員の妻」
「駐在員」「日系人」と立場で微
妙に排他的なグループに分かれ
る日本人コミュニティ。ボラ
ンティアに対して苦手意識も強
いが、活動の場さえあれば、「や
る気」はあるのだ。半年後の03

「今年はおっとお金を集め、活
動の長期的な広がりを目指す。
3年間、物質的なものより精神
の豊かさを優先する生活をして
いたけど、今後は物心両面の充
実を追求します」

「異文化は知らない、と言って
しまったらおしまい。子どもは
吸収が早くて、視野を広げさせ
る手応えがある」
と日野も強調する。

ジャーナリスト 津山恵子
（ニューヨーク）